

特集1:ドキュメンテーションへのマイナスイメージを研修で払拭。作り続ければ保育者にも子どもにも変化が生まれる

コラム:これからの時代、選ばれる園創りのために保育者と園が目指すべき姿とは？

特集1: ドキュメンテーションへのマイナスイメージを研修で払拭。作り続ければ保育者にも子どもにも変化が生まれる

ルクミーが主催する保育施設向け実践型オンライン研修「ルクミー みらい保育スクール」では、園・施設の課題解決や保育の質向上を目指す先生方を、さまざまな研修プログラムでサポートしています。そのひとつである、往還型「ドキュメンテーション活用」コースに参加されたのが、まがた保育園の今村先生です。

ドキュメンテーションを園に取り入れたばかりの頃は、「続けられるのか不安」「時間がかかって大変」と、ドキュメンテーションに対してマイナスイメージが大きかったといいます。「今はドキュメンテーション作りも遊びをすることも楽しい」と話す今村先生に、楽しめるようになった経緯や現在のドキュメンテーション活用法をうかがいました。

研修を受けて実践することがドキュメンテーションを楽しむカギ



(子どもの姿を語り合う場面)

園長先生から「ドキュメンテーションを研究してほしい」と言われて取り組み始めたばかりの頃は、「とりあえず写真を撮っている」状態だったと思います。

私自身も、日々「これをしなければならない」「こういうことをさせなければならない」と準備に追われ、ドキュメンテーションを楽しむ余白がありませんでした。

しかし研修を受け、「手を撮ってみるといいよ」「後ろ姿も物語るものがあるよ」とアドバイスをいただいて実践してみたところ、今までと違う雰囲気の写真が撮れることに気づいたんです。

ドキュメンテーションを作って他の職員と見返したり語り合いをするうちに、私の視点も少しずつ変わっていききました。

具体的には、「やっていること」ではなく、子どもの表情や動き、思いが伝わるような写真を撮ることに重点を置くようになったんです。

写真の読み取りを始めてからは、子どもたちの姿がよく見えるようになりました。

また、ドキュメンテーションを作るようになった昨年度から、職員同士で写真を介した会話が増えたり、子どもの育ちに関して一歩踏み込んだ話をするようになりました。

これが研修で話されていた「対話の質」の変化なのだと実感しています。

研修参加前に、ドキュメンテーションに関する本を読んで勉強していたのですが、研修を受けたことで「実践すること」がいかに大切かを学びました。

本で読んで理解していたつもりだったことも、研修によって理解が深まったように感じます。

今は、ドキュメンテーション作成に苦手意識のある職員にパソコンの使い方や作り方などを地道に教えながら、ドキュメンテーションに対する職員間の温度差をなくしていこうと取り組んでいるところです。

発行頻度に個人差はあるものの、みんな慣れてきて発行回数が増えてきています。

ドキュメンテーション作成の負担感は10から0へ、作る楽しさは0から10になりました。

全クラスで週1回以上発行。「記念写真」から「育ちの見える写真」へ

研修に参加する前は、イベントがあるタイミングでドキュメンテーションを作成していたため、発行頻度は2～3ヶ月に1回程度でした。

しかし今は、週に1回は必ずドキュメンテーションを作って発行するようにしています。

職員によって発行頻度に差はありますが、多いときだと週に5日、平均すると週3日程度は発行しているのではないのでしょうか。

ノルマは決めておらず、誰かに咎められることもないので、ドキュメンテーションに慣れていない職員も無理なく作成できていると思います。



(遊びに集中して取り組んでいる姿)

作成するうちに、ドキュメンテーションの内容にも変化が出てきました。

はじめは記念写真のような写真ばかりでしたが、今は子どもが集中して遊んでいる姿や育ちが見られる写真に変わってきています。

「1枚のドキュメンテーションに全員を載せなければならない」というプレッシャーも、今はありません。

ただ、1週間単位で全員が載っているように意識しています。

職員からは「作るのが楽しい」という声も聞かれるようになりました。

以前は1時間ほどかけていた作成時間も徐々に短くなり、早ければ15～20分で作れるようになっていきます。苦手な先生だと30分以上かかることもありますが、以前よりは早くなってきているはずです。

私の場合、子どもたちが遊んでいる姿を見ながらドキュメンテーションのイメージを考えられるようになってきました。他の先生が褒めてくれたり子どもたちが楽しみにしてくれたりすることで、ドキュメンテーション作成がますます楽しくなってきたと感じます。

他のクラスのドキュメンテーションも見る事ができるよう、作成したものはすべて事務室の掲示板に貼り出しています。

最近は日誌にもドキュメンテーションを活用し、ドキュメンテーションを作った日は、日誌の「活動」部分を空欄にしておき、その代わりにドキュメンテーションをセットでファイリングし、時間短縮を図っているところです。

保護者の方への発信も、月1回のクラスだよりと連絡帳から、ドキュメンテーションへと移行しています。

クラスだよりを廃止したうえ、連絡帳を書く回数・量を減らして、その分の時間をドキュメンテーション作成に充てているんです。

令和3年度 そうごみ 今村陽子

ドキュメンテーション
thank you

さあ！新年度！
年長児だし就学に向けてあれして…
これして…ここまでは**やせないと！**

お〜とあぶない！
子どもの気持ちを置いて行くところだった

まずは子ども達の様子をみることに・・・

- ・いろんな経験をする
- ・率しく全力で遊ぶぞ！
- ・自分たちで遊びを考え遊びを広げ友達との中も深めていく
- ・就学に向けて気持ちを持って生活する
- ・周りを見て仕事にようゆうをもつ！

元(“A”)何？確認攻撃キター
もーもーもーとして、すっごくのへ(=0=)ノ！

MERごっこ 天体観測 なんでもやさん

郵便バイク作り

大きな変化☆

あんなに不安と???っていった
「ドキュメンテーション研究」終わってみれば
研修を受け・発表して・取材を受けるなんてび
っくりなことになった!!!みんなにしゃっ
と伝わったかは分らないが自分なりにド
キュメンテーションの良さや楽しさを伝えてい
ったのだと思う。子ども達への寄り添い方や見
守り方も大きく変化したと思う。今度は捉えた
子どもの姿を「3つの柱」や「10の姿」と記録
できるように見ていけるよう、しっかりと記憶に
生かそうように取り組んでいきたい。

環境 園内研修をしたりして初めは良かったが長続きしなかった

ICT あまり出番がなかった

みんな観ながら使っていると思う。使っている方分らない時にその都度話をした。使っている方聞いてもまたると思えずし。

令和3年度もナイスチームワークでそこ(絆)入れ、保育に行かせる対話もたくさんあった。次年度にもしっかりと生かしていきたい。ありがとうございました。

(1年のまとめにも写真を活用)

ドキュメンテーションで子どもたちの遊びや職員の語り合いも変化

ドキュメンテーションを活用するようになって、子どもたちにも変化がありました。

たとえば私のクラスの子どもたちは、もともと控えめで、自分から遊びを提案するようなことは少なかったんです。しかしドキュメンテーションを活用し始めてからは、私の視点が変わって遊びも変わっていったことにより、子どもたちが自ら遊びを考えるようになりました。

こちらから広がる仕掛けを作れば、遊びもどんどん広がって行きます。

人気ドラマのごっこ遊びをするために道具を手作りしたり、宇宙が好きな子は天体望遠鏡と惑星を作ったり。

もともと行事も子ども主体で作るような園でしたが、ドキュメンテーションによってその傾向が強くなったと感じます。

先生たちの語り合いや、保育の環境づくりも変わってきました。

事務室に各クラスのドキュメンテーションを貼り出しているため、それを見ながら先生同士で作り方を聞いたり話をしたりするようになっていきます。

今まで、クラス内の先生同士で語り合うことはありましたが、研修後はクラスを越えた語り合いが増えてきている印象です。

子どもが遊んでいる様子を見て「どうしてこのような行動をするのだろうか？」という疑問を語り合うこともあります。

環境づくりに関しても、今までは年齢に合わせたものを用意していただけだったものが、「今の子どもに合った環境づくり」を意識するようになってきました。

ドキュメンテーションに対する保護者の方の反応は、今のところポジティブなものばかりです。

最初は「連絡帳の記入が減ります」とだけ伝えて、いきなりドキュメンテーションを配布しはじめたのですが、園だよりで園長先生からの説明があったことで、特にご不満もなく理解していただいている様子です。

「子どもの発達を見ることができる」「子どもの楽しそうな様子が見られて面白い」という声も聞いています。

楽しみながら作って、保護者にも良さを浸透させたい

今のところ、職員間ではドキュメンテーションを活用できています。

これからは保護者の方にもっと、ドキュメンテーションの良さに気づいてもらいたいですね。

今はまだ記念写真のように捉えている方もいらっしゃるようなので、未満児の頃からドキュメンテーションを活用し、保護者の方々の感覚も変えていけたらいいなと思っています。

もう少し発行頻度が増えたら、保護者アンケートを取る予定です。

保護者参観日には、動くドキュメンテーションのスライドを作って保護者に見てもらうことも検討しています。

今、当園から他に2人の先生が往還型「ドキュメンテーション活用」コースに参加しています。

研修に参加した先生が増えていけば、さらに活用が進むかもしれないですね。

ドキュメンテーションには正解がありません。

とにかく作って、楽しく会話をしながら今後も活用していきたいと考えています。

コラム： これからの時代、選ばれる園創りのために保育者と園が目指すべき姿とは？

情報量が増えて変化のスピードが早い今の時代、未来を見通すことが非常に難しくなっています。

社会も人の価値観も変わってきており、保育のやり方や保育園という場所の在り方も変わらなければなりません。

では先の見えないこれからの時代を生きる子どもたちに対し、どのような保育をしていくべきなのでしょう。

2022年2月26日にユニファが開催した「みらいへの一歩セミナー」では、東京大学名誉教授であり白梅学園大学名誉学長の汐見稔幸先生と社会福祉法人つばさ福祉会 常務理事の渡部史朗先生、ユニファ株式会社代表取締役CEOの土岐泰之の3名で、これからの時代の選ばれる園創りについて語り合ってもらいました。

これからの時代、選ばれる園創りってなんだろう？
～みんながワクワクするために必要なこと～

東京大学名誉教授 白梅学園大学名誉学長
汐見 稔幸 先生

社会福祉法人つばさ福祉会 常務理事
渡部 史朗 先生

ユニファ株式会社 代表取締役CEO
土岐 泰之



先が見えない時代だからこそ、人として大切なことを忘れずに

今は、新しい民主主義を目指す人たちと、力で説き伏せていこうとする人たちの2つの方向性が存在する時代。時間はかかっても、みんなで納得いくまで話し合ってお互いの違いを認め合い、「違いがあることは豊かだよね」と面白がるのが、これからの時代は大切になると汐見先生は話します。

そのような社会に出ていく子どもたちに必要なのは、保育園で民主主義の練習をすること。つまり、話し合いをして決めることや自分の意見をしっかり伝える練習が必要なのだと思います。そして保育園も、自分たちのことを自分たちで相談して運営していくような、民主主義のコミュニティになっていくことが求められるのだそうです。

では、先が読めない今の時代に何を大切にすべきなのでしょう。汐見先生は、「変化が早い時代こそ、人間がずっと昔から大事にしてきたこと(＝不易)を大事にしたほうがいい」といいます。毎日みんなが好きなことを一生懸命やって目を輝かせて生きていくことは、どんな時代でも大事だったわけです。そこで保育園でも、今を楽しそうに生きる子どもたちを大切にしながら、民主主義の中を生きていくために必要なスキルを折に触れて身につけさせていくことが大切になってくるでしょう。

保育者は子ども一人ひとりの光る部分を見つける探検家

先が見えないこれからの時代を生きる子どもたちに対し、保育者は何ができるのでしょうか。

汐見先生は、大人の経験則で子どもに教育するという従来の啓蒙主義が成り立たなくなっていると話します。社会変化がゆっくりだった時代は、将来を見通しやすいので、大人の経験をもとにしたアドバイスが大きく外れることはありません。

しかし今は、どのような未来になるか誰にも予測できず、「何を学ばばいいのか」や「何を身につけるべきか」をはっきり伝えられない時代です。

子どものほうが面白いものを見つけることが得意であり反応も早い分、新しい仕事を見つけられる可能性もあります。子ども自身が自ら社会と対峙しながら、「これからこういうことをやっていけば、僕は面白い生き方ができるかもしれない」ということを見つける時代になっていくと考えられるのです。

そこで重要なのが、私たちの意識を「社会から子どもを見る」ではなく「子どもから社会を見ていく」という流れに変えていくことだと渡部先生は話します。

大人は自分の生き方を見つけようとする子どもを応援し、ときどき「こういう面白い生き方している人がいるから話を聞いてみよう」などと、素敵な文化を示してあげることが大切です。
それに反応するかどうかは子どもが決めていくことになります。
子どもの自分探しを上手に応援するのが大人の役目、教育の論理になってきたということです。

子どもたちを宝石の原石として、まるで宝探しをするように見つめる眼差しがこれから保育者にとって大事になると汐見先生は指摘します。
まずは、その子の光る部分を見つけたら「将来このような能力につながるかもしれない」と保育者が見抜く。
それを保護者にも伝え、保育者は磨いてあげる保育をしていく。

渡部先生は、そのような保育者の姿を「原石を探す探検家」に例えます。
原石を探したり磨いたりすることが、保育者にできること。
そして、子どもが自分探しをできる場所が保育園。
そのようなイメージで行う保育はきっと楽しいだろう、と汐見先生も顔をほころばせていました。

子どもという原石を磨くためには豊かな「磨き手」が必要

子どものなかに原石を探して磨くことが保育者の役目である一方、原石を磨くには「本物の文化と豊かな磨き手が必要」だと汐見先生はいいます。

いくら原石でも、上手な磨き手がいなければなかなか宝石にはなりません。
保育者がいい磨き手になるためには、長い時間をかけてその分野の専門家を作ることもひとつの手です。
しかし、人材育成のために十分な時間を取ることも難しいのが実情です。

そこで、地域に住む何かしらの専門家の方が保育に関わってもらえるよう働きかけてはどうかと渡部先生は提案します。
地域の人も保護者も子どもも、地域みんなが「保育園に行くのが楽しいしそこに行く学びがある」と思える、地域コミュニティのような場所にしていきたいと思います。

それでは、保育園が地域コミュニティの起点となるためには何が必要なのでしょう。

土岐は「新しい取り組みを行うためには、まず保育者の心と時間のゆとりが必要」だといいます。
ゆとりのある状態で子どもたちと向き合って表現を応援し、それを情報発信していく。
その結果、園の想いや取り組みに共感する仲間が集まり、リアルだけでもオンラインだけでもない地域コミュニティができていく。

そこでコミュニケーションを生み出す際に、ユニファが持つ技術を活用できるのではないかと考えているそうです。
行政や専門家、地域の方々など、さまざまな人と人を繋ぎ、みんなが安心して集まれる場所を作っていく。
そのような地域の場づくりに対し、ユニファ、ルクミーとしてお手伝いをしていきたいと思っています。

保育者が心と時間にゆとりをもつ方法はさまざまですが、セミナーの中では「事務仕事」についてお話がありました。
汐見先生も渡部先生も、「事務仕事はAIに任せ、人間にしかできないことを保育者がやるべき」との意見で一致。
保育者の本来の仕事は「子どもからどれだけ深く学べるか」であり、地域も含めて「学び合う共同体」になれたとき、啓蒙主義的な保育のやり方から解放されるのではないかとというのが、汐見先生の総括でした。

そうしてコミュニティができたときに、人と人をつないだりコミュニケーションを生み出す部分に、ユニファの技術が貢献できるのではないかと土岐は考えています。

目指す園作りに対して、いきなりすべてを変えることは難しいかもしれません。
しかし、ユニファとして貢献できることがないか、これからも模索し続けたいと思います。